

コト・仕組みの Ming

モノ以外の Ming を探る

CWB 奥谷京子 (WWB ジャパン代表)

今 月号はあらゆるところに Ming が散らばっている。今後も月刊シビルミニマムは毎月そうなるであろう。

まだ私たちにとっても新しい言葉で、知ろうと思えば思うほどミステリアスな言葉。私はカンボジアのデン君に説明するとき、「1度入ったら出口が見つからないラビリンスのようなものだ」と伝えた。しかし、端的に言えば、「効率や便利さを追い求めて、お金で解決してきた瞬間から失ってきたものを今こそ選びなおそう」ということだと私は解釈している。

7 月7日の西日本を襲った豪雨と土砂災害。たまたまあの日から1週間後、マレーシアのホテルで日本のテレビが入ったので初めて映像で見て、涙が出てきた。東日本大震災の時と同じく、ただただ流されていくものを見るだけで、自分の無力さをまた感じてしまった。

いつもこういう災害の時はすぐに動くのが私たちのグループのフットワークの良さでもある。ただ、私もアジアに軸足を移してしまっただけで今はすぐには動けない。さて何ができるかとモヤモヤしていた。海外にいと主なる情報源はインターネットだが、「物資を送ることは迷惑。むしろお金を」という記事を目にしたが、ここに私は引かかった。

私 たちのグループは7年前の東日本大震災の時に毛糸を全国から受け取り、800組以上の方のご支援をいただいている。いち早く被災地に入って生きがいと仕事づくりを掲げたおかげでテレビや新聞記事で紹介されるごとにドバッと東京には毛糸が寄せられ、ストックできずに目黒の地下の倉庫を借り、さらには城南島の倉庫にまで長らく置かせてもらっていた。一時期は宮古のアパートの1室を埋め尽くしていた。実はこのような維持管理にもかなり経費がかかっている。

初年度はニットデザイナーの三園さんと被災地の女性たちにこの色の組み合わせで編んでほしいというキットを準備するため、この送られてきた毛糸を色別に分け、毛糸の山をかき分けて別の毛糸を探し、太さが合うかどうかなどを1つ1つチェックした。40

セットを作ったくらいでは、まだこの山は減らない！そしていただいた毛糸の中には、粗悪品も確かに入っていた。虫食いで虫と一緒に入っていたり、だいぶ昔から持っていたのか一部が色あせたり、あるいは編みかけの棒が刺さったままのもの、さらには機械編みの既製品を送ってくる人までいた。「ゴミ処分場じゃないのよね…」とつぶやきたくなることもあり、樟脳のおいさと闘いながら、どうにも使えないものは事業ごみとして何十袋か処分させてもらった。なので、中途半端な物資が時に迷惑になるというのもよくわかる。

しかし、世界を見渡して後生大事に取っていた毛糸を自分たちが送料を払って送ってくれる国が他にあるだろうか？とも思う。中には温かいお手紙、菓子折りやジュースまで入れてくださった方もいた。この善意こそが事務局側の折れそうになる心を支えてくれた。また、被災地の編み手さんもいただいた毛糸を無駄にしたくないという気持ち、そしてただでもらったからどんな扱いでもいいのではなく、1つ1つ心を込めて編み物に打ち込んでくださった。そして、世界にたった1つのマフラーを買ってくださったお客様の他にも初給料で彼女にプレゼントをしたら涙を流して喜んでくれたという報告もあった。

ソーシャルネットワークプロジェクトで集まった善意の毛糸は大事な Ming の財産だ。そしてそれは今、1年後の大地震のあったネパール、ミャンマーやフィリピンの難民キャンプにまで届けることができている。募金をいただいただけならば、こんなストーリー展開は生まれなかったと思う。今回の豪雨での私なりの応援の仕方も、この善意で集まったものを処分せずに何か活用できる方法がないかと考えている。生かす道をもっと考えられないか、そんな発想になれたのも、自分がアジア10カ国とつながっているからこそだ。

Ming は何か伝統文化的なモノを再発見するだけではない。ソーシャルネットワークの事例で挙げたような市民の力を集めたりするコト、仕組みなどもそうだ。そして単にお金を稼ぎたいから日本に行くというのではない、お互いに学び合える人才の交流。まずはこの前半12ページではモノ以外のヒト・仕組みに着目していきたい。